真由ひとり

中町 礼願

いつのころからだろう。

自分のテンポで歩けていないことに気付いてしまった。六十歳で定年再雇用契約をしたとき、安堵する自分がいたのも事実だが、これは本当の自分じゃないとの疑問が浮かんでは消えていた。

四月生まれの木下真由は六十の区切りを迎える少し前の二月、再雇用契約にサインした。これで四月の給料はピーク時の半分にも届かなくなる。

五十五歳で所謂役職定年を経験し、そこからは生活の見直しも行い、減額される前と変わらない貯蓄を続けた。しかし今後はそうもいかない。

真由は六人兄妹の末っ子であった。五人の兄にたった一人の妹。普通なら蝶よ花よで育てられて当然の境遇だった。しかし父は非常に厳しかった。末っ子の真由は就職したら一人で生きていかなければならないのだ。家の商売を手伝わせるなんて絶対ない。だから一人で生きていくために親や兄を頼っちゃいけない。そんな風に刷り込まれてきた。

両親は酒屋を経営していた。売上も頭打ちで展望の見えない商売だった。飲酒人口は年々減少している。対策が必要だった。手作り弁当や野菜の販売を実施しても、一時の急場凌ぎに過ぎなかった。それこそ五里霧中だったのだ。

そんな経営難に悩む両親を横目に、真由は私立大学に入学した。就職戦線を有利に出来るならと、その時ばかりは反対されなかった。

やがて地下鉄新線が開通し、乗降客増で集客が見込めると踏んだ父はコンビニへと業態を転換していった。東京のコンビニが北洋市に進出して何年も経たないうちの決断だった。

今では関東エリアでも見かけるようになったコーヨーマートの北洋市フランチャイズ一号店だった。父を継いだ長男がテレビ取材を受けるほど注目されるようになったのは真由が大学を卒業して間もないころだった。

北洋東通り公園の駅周辺はたちまちベッドタウンになり、朝から深夜まで客足が途絶えなくなった。

真由は学校を卒業すると、好業績の実家の援助をいっさい受けない生活をスタートさせた。

幸いにしてエクステリア大手の北洋支社に就職した真由は、給与面でも恵まれていた。男女平等なんて無縁の男社会に、性別なんて糞くらえと飛び込んだのだった。家庭が男中心の世界で育っただけに、真由の心に秘めた『負けてたまるか魂』は人一倍強かったと思う。

だからという訳ではないが、昇進もしっかり勝ち取ったし、手取りも毎年増えていった。賞与だって同世代の男性に見劣りしなかった。

真由は三十歳を迎えるタイミングでマンションを購入した。その時だけは長男に頼んで保証人欄にサインしてもらったが、金銭的な援助は全くなしだった。というより頼りたくなかったのだ。

真由にとって住処を確保することが男性に頼らず生きていくための証しでもあった。

あれから四十年近い月日が流れていた。

真由に一枚のハガキが届いた。

桜もライラックも咲き終えて、関東や関西からの旅行客が激増する六月のはじめ。

――真由さん。お元気ですか。林田です。

今度、仕事で北洋に行くことになりました。二泊

三日の予定ですが、初日に業界団体の会合に出席します。その夜、大学の仲間六人で集まるのですが、真由さん、サプライズで参加しませんか。

自分は会合の懇親会を乾杯だけで脱出しますので、大空エアホテルのロビーで待ち合わせましょう。日時は月末の二十九日金曜日です。夕方六時にはロビーに顔出せると思います。無理にとは言いませんが、北浜のワイン工場に一緒に行ったメンバーですから、真由さんにもお馴染みの人ばかりです――

林田はもともと東京の人間だったから、就職でさらりと北洋市を離れてしまった。本人も好きだったという北洋の街をあっさり捨て去り、東京へ帰って行ったと言うべきか。

真由にとっては何れこの地を離れる人だったから、特別な感情を抱いていいはずもなかったし、特別意識したこともなかった。男の人に壁を作ってしまう癖のあった自分には友達以上でも以下でもなかったというところだろう。それでも林田のどこか旅人的な雰囲気が、嫌いではなかった。異性を意識しないでいられる貴重な存在だった。

そんな林田のハガキは嬉しかった。

今の自分の存在意義に悩み続けていたときだったから、尚更ときめいた。

もしかしたら私のレゾンデートルってやつを再発見させてくれるかも知れない。

早速ハガキを返した。

――林田君。思い出してくれてありがとう。同じ北洋に住んでいるのにワイン工場に一緒に行ったメンバーとは会えていないの。

全く接点がなかった。だからこんな機会を与えてくれて本当に嬉しい。

ところでどうやって私の住所を知ったの？

同級生に伝えた記憶はないわ。

それはお会いした時に教えてね。今から楽しみです――

真由の仕事は再雇用契約後もほとんど変わらなかった。それなのに、もう貯蓄は無理だった。マンションのローンも繰り上げて完済し、あとはしっかり老後資金を蓄えることに専念したかったが、なかなかそうもいかなくなった。

幸か不幸か、実家との関りも希薄になり、冠婚葬祭の出費は最小限に済ませることが出来ていた。

新緑の北洋は何もかもが一緒に輝いて心が浮き立つ。ハガキを受け取って以来、日差しを全身で感じるようになった。仕事を終えて帰宅する際にも、街並みを散策するゆとりが出てきた。季節を実感出来ることが嬉しかった。

自分は仕事に執着していたのだろうか。会社に依存していたのだろうか。

これからも同じ会社で働くことは自分らしくないのではないか。成果を上げても待遇面の評価は全く変わらないのだ。

会社から歩いて十五分ほどの道のりは、三十年も見慣れているはずなのに、景色も空気も新鮮だった。テラスのカフェに立ち寄ってみる。

私は三十八年間、同じ会社に勤務した。転勤もなく、配置転換もほとんどなかった。真由にとっては何人もの上司を見送り、年下の人間さえも何人も送り出していた。

そろそろ私が送り出される順番なのかしら。社内で自分がどう思われているかなんてこれまで考えて

もみなかったけど、引き際としてはちょうどいいタイミングなのかも知れないな。
ブラックコーヒーがモヤモヤを払拭させてくれる。
林田君が来る前に結論を出そう。ふとそんな気持ちが湧いてきた。
もう会社には十分奉公したと思う。新たに自分のテンポで働ける場所を探すのもいい。

会社への執着心がスーっと消えた土曜日、両親のお墓参りをした。

「お父さん、会社辞めてもいいよね。もう六十になったのよ、わたし」
お線香の煙が身体に纏わりつく。匂いがついてしまうなあと、この場に相応しくないことが頭を過る。
「一人で頑張って来たけど、疲れちゃった。ずーっと一緒だった先輩も辞めちゃったし、本音を話せる人がいなくなっちゃったからね」
今度は母に話しかける。
母が真由を生んだのは四十一歳のときで、念願の女の子の誕生は本当に嬉しかったと言っていた。娘が可愛くて仕方がない母に対して、夫は甘やかすなと言うのが口癖だった。
真由が小学校に入学したとき、長男は既に成人し、次男も高校を卒業した。真由は五番目の兄に手を引かれて小学校に通い始めた。
歳の近い兄たちが優しかったので、真由は日々を楽しく過ごせていた。
「お母さん、大変だったわね。厳しかったお父さんに愚痴の一つも言わないで頑張ってたもんね。私はチー兄ちゃんにいつも大事にしてもらったから、少しも淋しくなかった。だからお母さんの辛さなんて気付かずに伸び伸び育ったんだわ」

自分は結婚もせず、家族の関係を構築した経験がない。それでも子育ての真似事はした。
真由が小学校六年生のとき、長兄のところに娘が誕生した。そのころ兄嫁も酒屋の配達を手伝うことが多かったので、真由がオムツを替えたりした。おんぶは日課のようになっていた。
六人兄妹の末っ子で一人娘。真由は本当に難儀なポジションにいたのである。
「お母さんのように献身的な母親にはなれなかったけど、これでも一生懸命生きて来たのよ。独身を貫いたのは本意じゃなかった。でもね、縁には恵まれなかったのね」
真由は結婚願望がなかったわけじゃない。心ときめく人もいた。交際を仄めかしてくれた男性もいたし、相手のご両親に紹介されたこともある。
それでも結婚に至らなかったのは、親子関係が希薄だったからなのかも知れない。それに連れ合いとの繋がりがイメージ出来なかったのだ。

墓参りを終えて西の杜の坂道を下ると、真新しいレストランが目にとまった。
スケルトンのラウンジにカップルが何組かいた。居心地が良さそうで思わず吸い寄せられてしまった。
楡の木からこぼれ落ちる日差しが、香ばしいピザ窯の匂いを引き立てている。

真由はミックスピザのハーフサイズと白だしの和風パスタのセットを注文した。
テーブルに便箋を広げる。定年再雇用の身だから退職願の提出なんていらないのかも知れないが、一応書いておくことにした。
退職を躊躇しないためでもあった。何行も書くわけじゃないのにペンが進まない。初めてのことだからパソコンで事例集をチェックしたし、書くべきことは決まり文句なのだ。
ここへきて迷うなんて。

パスタのセットが運ばれてきた。真由は慌てて便箋を片付けた。
「まもなくカンパーニュが焼き上がりますので、お好みでお召し上がりください」

真由はボリュームの多さにびっくりしたが、思いがけないサービスに顔がほころんだ。
メニューに載っていないサービスはお得感がある。
案内通りバケットに山盛りのカンパーニュとトングを持った女性がやってきた。
「いかがでしょうか」
「では一つください」
ライ麦のパウダーがパンのふっくら感を際立たせている。真由は小さく千切ってパスタの旨味を吸い込ませた。
なんだかラッキーな気分が食道に伝わっていく。これは僥倖かもね。

「退職願はいいや。口頭で伝えればいいよね」独り言を呟いた真由はすっかりリラックスしていた。

翌週の月曜日。所属の課長に退職する旨を伝えた。自分より一回り以上若い課長は別段驚いた様子もなく、淡々と受け止めていた。
「有給は使いますか」
「出来れば消化させて頂きたいと思います」
「では引き継ぎは石川君にお願いしましょうか。それともご希望があれば伺いますが」
「差し支えなければ、隣席の柿崎さんに申し送り出来ればと思いますが」
「そうか、柿崎さんは何かと接点が多いですもんね。いいでしょう。そうしてください」
小さなやり取りで、肩の荷がおりた。
一週間の引継ぎはスムーズだった。事前に書き溜めた引継ぎ書類が大いに役立ち、柿崎に感謝された。データや見積書の類はメモリーカードに移して渡した。特に喜ばれたのはクレーム報告書の事例集だ。これは信頼した先輩から引き継いだものだった。
顧客管理データは共有ファイルにアップされていたので、誰でも見られるようになっている。
真由の仕事は丁寧だった。それでも、ここまで記述する必要なんてないよ……みたいなことを上司に言われたこともあった。しかしその丁寧さが申し送りには役立った。

晴れやかな気分で十五分の帰路をスキップした。実際にした訳ではないが。
みんなに会う日まで一週間。美容院に行ったり、洋服を新調したり、ミュールも新しいのを買おう。やりたいことが溢れてくる。

そして今年初めて日中の気温が三十度を超えた金曜日。
真由は薄いカーディガンを手にホテルへ向かった。急ぎ足では汗ばむほど、日中の熱がアスファルトに残っている。
約束の六時にはまだ二十分ほどある。会社に出社する途中でときどき寄っていたコーヒーショップでアイスティーをテイクアウトした。
ホテルまでは二百メートルもない。余り早く着いても具合が悪い。逸る気持ちを見透かされてしまいそうだ。
一息ついて火照った身体を冷ました。

十分前、ホテルのロビーに入った。チェックインを待つ宿泊客が何組か並んでいる。
真由は空いているソファを見つけると腰かけた。ここならエレベーター室も玄関口も見渡せる。林田の会合がどこで行われているかは聞いていなかった。
程なくしてその林田はエレベーターから出て来た。真由と視線がぶつかる。
林田はびっくりするほど変わっていなかった。少しだけ肉付きが良くなったくらいで、若々しく見えた。
真由は平静でいられなかった。自分はどれほど老けて見えるのだろうか。髪を染める習慣はなかったし、白髪も気にしたことがなかった。
林田にどんな印象を持たれたろうか。そうだ。このメガネも学生時代は無縁だった。
そんな真由の心配をよそに、林田は笑顔で近づい

てきた。
「久しぶり。よく来てくれたね」
林田は握手を求めて来た。
自然に手を差し出した。
「思い出してくれてありがとう。ハガキ、どんなに嬉しかったか」
少し目が潤みそうになったが、大きく息を呑み込んで堪えた。気づかれないように質問を向けた。
「林田君、私の住所……」
「ああ、そのこと。別に普通にご自宅に電話しただけ。最初はちょっと躊躇してたみたいだけど、鯉沼ゼミで真由さんと一緒だったと話したら教えてくれたんだ」
家の電話を知ってくれていたのかしら。
「電話番号？　コンビニで検索したんだ」
「そうなの？　機転が利くこと」
「まあね。早速だけど行こうか」
林田が歩き出す姿を追いながら、学生時代を思い出した。
学園祭の夜、お酒やおつまみを買いに来てくれたことがある。偶然、店番を頼まれてレジにいたとき、林田と雅史君が買い出しに来たのだ。あのとき、ゼミ室でみんなが集まっているからと強引に誘われた。雅史君が強引だった記憶がある。彼はキツツキ通りで餃子屋のバイトをしていて、貯めたお金で軽四輪を買っていた。
真由は兄が夕食を終えて店に戻るのを待って雅史の車に向かった。
そうだった。あれがきっかけで皆と親しくなった。林田はゼミが一緒だったけど、雅史君や他のメンバーは違った。それなのに鯉沼ゼミに何故か集合していた。
「林田君、ワイン工場行ったとき、何故私が林田君の車だったの？」
「急だね。四十年近く前のこと。なんでだったかな。あのとき三台で乗り合わせたでしょ。雅史と僕が軽四だったから二人ずつで、川尻が普通車だったから三人だった。そんな感じで女性三人が別々に乗った。そうだったかな」
「私、男性と話すの慣れてなかったけど、あのときは苦痛じゃなかったよ」
「よく覚えているね。ああ、そこだ」
林田は『白樺』という看板を指差した。
二階の窓際がガラス越しに見える。顔の半分が見える女性が手を振っている。えっ、寿梨ちゃん？懐かしい顔が何人か立ち上がって手を振ってくれた。
「今日は我々入れて七人かな。あのときの全員だね」
「私、誰とも交流がなかったわ。寿梨ちゃんとは会社が近いから一回だけ会ったかな。でも、もう二十年も前のことよ」
店に入ると皆が拍手で迎えてくれた。真由が来ることを予想してたのだろう。
再会を祝い、近況を披露し合ったところで、真由は胸の内を語った。
「わたしね、今月いっぱいで会社辞めるの」
皆が神妙な顔をした。一瞬それぞれの人生を振り返ったのかも知れない。
「二月に再雇用契約したんだけどね。なんか気力が維持出来なくて」
「上り坂を歩いていたときは迷いなんてないよね。それが平坦になり、下るようになると、周りの些末なことにも目が行くようになるよね」
寿梨ちゃんらしい感想だ。続けて話す。
「私もね四十超えたとき、会社の居心地が悪くなったの。窮屈になったのね。でね、子供も手がかからなくなったので、転職したの。だけどね、四十過ぎて正社員として採用されるのは難しかった。結局、それからは派遣やパートばっかり。それが気楽になっちゃったってわけ」
寿梨は今、介護のパートをしているという。
早紀ちゃんが自分は専業主婦で何の苦労もして来なかったと溜息をつく。彼女は見合いで結婚した相手と三年で別れ、父の部下と再婚した。子供を持た

なかったゆえか、他人よりゆったり生きて来たようだ。
「真由さん、結婚は？」
早紀ちゃんの質問が直球過ぎて苦笑いするしかない。
「私？ずっと独りよ。願望がなかったわけじゃないのよ。恋愛だってねえ。だけど真似事で終わっちゃったわ」
ビールを流し込んで続ける。
「もちろん、まだ諦めてないわよ」
言ったそばから少しの後悔が過る。
真由は結婚も転職も未経験なのだった。だからまだ見ぬ扉の向こうを覗いてみたいのかも知れなかった。よく見ると皆は結婚も転職も経験しているようだ。林田や菅谷は孫もいるという。
真由は生きて来た証しも朧気だったし、自分の生きる意味なんてつい最近までは気にしたこともなかった。
それが定年を迎え、急に居心地が悪くなった。会社は自分の居場所ではないと思うようになった。いや、景色がぼやけてしまって背中のあたりがざわついた。
ぼやけた景色の向こうが見たくなったのかも知れない。
「私、これから仕事探してみるわ。同じ街に住んでいるのに、会えなかったのは自分の怠慢だった。早紀ちゃん、寿梨ちゃん、たまに会おうね。仕事探しのアドバイスもお願いしたいもの」
真由は前向きな気分になれた。
明日も仕事だという男性陣と夫大好き早紀ちゃんが帰って行った。
「もし良かったら、宿泊先におみやげがあるので寄って行かない」
林田の誘いを自然に受け留めている寿梨ちゃんは何十年もの空白がなかったようだ。
真由は率直に聞いてみた。
「二人は時々会ってたの？」
寿梨が笑顔を向ける。
「私が東京行った時とか、彼が出張で来た時とかね」
「へええ。そうだったの」
「でも、たまに会えるようになったのは、ここ五、六年かな」
寿梨の言葉を引き取るように林田が続けた。
「今日みたいに出張で北洋に来る機会があってね。その時も同じようにハガキを書いて、携帯の番号教えて」
「やっぱり寿梨ちゃんが一番に浮かんだのね」
真由は嫉妬ではなく、素直な感想を口にした。
「林田君が帰省する時、間に合わなかった寿梨ちゃんに手紙預かったの、私だもんね」
「そんなことあったなあ」
林田が一瞬立ち止まった。
「募る話はラウンジで」
夜の九時半は少し肌寒かった。
寿梨ちゃんと真由が二十五階のスカイラウンジで待っていると、林田が大きな荷物を持って来た。
どこかで見たような紙袋を六つ下げている。
「これねえ、亀戸事業場で大量に余ったやつ。入浴剤や清涼錠剤、乳液、歯磨きセットなんかが入ってる。鐘ヶ淵ケミカルのシャンプーもあるんだ。そこもファーワンケミカルのグループになったからね。それと東京銘菓は日持ちするものだから寿梨ちゃん、皆に渡して」
若草色の紙袋はソフィエブランド。見慣れたカラーだった。
寿梨がいつも車なのを知っている林田の頼みである。
「早速、北洋組をまた招集しないとね。真由さんにも連絡するね」
真由は嬉しかった。今日、鎧兜を全く身に着けていなかったことに気付く。何十年も会っていなかったのに、一瞬で学生時代に戻れた。ブランクもブラインドもなかった。

月が替わった月曜日、事務所に社員証と和菓子を持って出社した。
手続き上の処理は済んでいたので顔を出す必要はなかったが、ほんのケジメのようなつもりだった。
コロナ禍で送別会のような催しも気楽に辞退出来たので、せめて挨拶くらいはすべきと考えたのだ。
支社長付の秘書に手土産を渡し、挨拶を申し入れた。執行役員でもある支社長は多忙だったが時間をくれた。

「木下真由さん、長く会社に貢献してくれてありがとう。本当にお疲れ様でした」
通り一遍の社交辞令がかえって良かった。何の感情も湧かなかった。この先どうするのか聞かれなかったし、たまには寄って下さいとも言われなかった。
これで文字通り解放された。
時間に拘束されない日常を少しの間だけ味わうことに決めた。
ポプラ並木の学園通りを歩き、植物園を抜けたとき、携帯が鳴った。寿梨ちゃんだった。
「うわー、嬉しい。早速のお誘いかしら」
「うん。お土産預かったままでは落ち着かないので皆に連絡したの。それで今週金曜日に集まることにしたんだ。どう?」
「もちろんＯＫよ。今日で会社卒業して来たしね」

「そっかー。ひょっとして今自由?」
「うん。植物園の脇をぶらついてるわ」
「えっ。私、ワンちゃん連れて学園内をお散歩中なの。良かったら来ない」
農学部の前のカフェにヨークシャテリアを連れた寿梨が居た。
「私ねえ。二年前に夫と別れてね。それ以来この子が家族なの」
この前の飲み会で寿梨は普通に振舞っていた。誰にも伝えていなかったようだ。
聞けば、寿梨はお見合い同然の紹介で結婚し、二人の息子を授かった。その子たちは生家を離れて就職し、忘れた頃にしか帰って来ない。
五つ年上の夫は公務員で六十二で引退した。それで田舎暮らしを突然言い出したのだ。寿梨は迷うことなく離婚した。
「私ね、一昨年の秋に空き家になってしまった実家をリフォームしてね。戻ったの。共有財産は全部半分に分けてお別れよ。向こうの両親や親戚筋とも折り合いが良くなかったから迷いはなかった」
「結婚って二人だけの関係じゃないのね」
「私の父も公務員だったから、その関係で勧められるままに結婚しちゃったのね。大恋愛の末の結婚じゃなかったからかも知れないけど、離婚した時の喪失感は人様より軽かったみたい。息子たちも随分心配してくれたけど、反対はしなかった。思ったほど落ち込まなかったわ。こんなこと誰にも話してないけどね」
「寿梨ちゃん、強いわ。私なんて一歩踏み出す勇気もなく、今日まで来ちゃったもの」
「何よ。継続は力なりって言うじゃない。真由ちゃん、頑張ったね。これからは時間つぶしと思って気楽に働けばいいのよ」
真由は背負ったものが急に軽くなった気がした。
「でもね。保険証の任意継続とハローワークの登録は必須ね。使える権利は行使しないと」
「そこまで考える暇がなかったかも。総務からアドバイスされたのに、すっかり忘れてた」
真由にはやらなければならないことがある。退職金の運用が確定拠出型年金制度を採っていたので、

これを移管するには個人型確定拠出年金の口座を開設しなければならないのだ。ハローワークも行かなくちゃ。

「会社辞めると全部自分でやらなければならないのね。ああもう全部忘れたい。迷惑もハローワークもあるかい……って感じ」

「えっ、やくざ映画好きなの？？」

「寿梨ちゃんこそ何で知ってるの」

二人が声を上げて笑い合うと、寿梨の膝の上で寝ていたヨーキー君が立ち上がった。

頃合いだった。金曜日の集いを確認し合って別れた。

最近は北洋市も内地の梅雨を思わせる日がある。部屋の模様替えを思い立った真由は、汗ばんでいた。皆に会う時間には余裕がある。シャワーを浴びよう。いや、お風呂を沸かして林田君の入浴剤を使おう。

ベークの入浴剤は発砲しながら若葉の香りで身体を包んでくれた。そう言えばファーワングループの樽前ロジにスライドシャッターを採用してもらったことがあった。見積はゼネコンに提出したが、真由が設計事務所を口説き落としたのが奏功したのだ。

設計事務所の賀詞交歓会で交換した名刺の人物を辿って仕事を手繰り寄せたのである。

私も少しは足跡を残せたのかな。林田君に言い忘れちゃったなあ。私の生きて来た意味もあったじゃない。会社にだってそれなりに貢献してきた。存在意義はあった。じゃあ、評価に不満を抱いていたのかしら。もっと褒めて欲しかったのか。現実の言葉で感謝されたかったのだろうか。

いや、多分そんなのじゃない。価値観が近くて、共感出来る存在が欲しかった。親しかった先輩が去り、気楽に笑い合える同期も居なくなった。多分、私、心のバリアフリーが欲しくなったんだわ。普通なら夫であり、子供がそんな存在になるのだろう。

私は家族を築いて来なかった。自分だけのサイズに合った巣作りはしたものの、居心地の良い共有スペースを見つけることはなかった。

林田君の誘いで参加した集会は本当に居心地が良かった。気の置けない還暦女子会も恒例化しそうな予感があった。

長風呂を切り上げて、目的地に向かった。

真由は生きる意味を見失っていたのだろう。昨日までの見慣れた道には何も見えていなかった。でも今日の心持ち一つで、景色が違って見えることに気付いた。

来週からは気楽に働ける職探しでもしよう。

二階の窓にはこの前と同じように手を振ってくれる仲間がいた。

（了）

―あとがき―

ノートＰＣをお腹に載せてくの字に立てて、あるいは横向きに寝て片手打ちしました。前立腺の炎症で座位をとれず、それでも今回しかないと思い立ちました。

主人公の真由は想像の人物ですが、書き留めておきたかった人物像です。自分の存在意義は自己完結するものだけではないと気付いた真由。周りに感謝されたり、温かい評価を実感出来れば素直に嬉しいもの。そうした他人に依存する存在意義がモチベーション維持の原動力になると気付き始めて、違った環境に羽ばたこうと決めたのですね。彼女の未来を覗くことは出来ませんが、必ず自分の生きる意味を見つけてくれたのではないでしょうか。